

## 北海道の一村一品運動の展開

誌名	農村生活研究 = Journal of the Rural Life Society of Japan
ISSN	05495202
著者	小林, 哲郎
巻/号	66号
掲載ページ	p. 26-30
発行年月	1987年10月

農林水産省 農林水産技術会議事務局筑波産学連携支援センター  
Tsukuba Business-Academia Cooperation Support Center, Agriculture, Forestry and Fisheries Research Council  
Secretariat



## 北海道の一村一品運動の展開

小林 哲郎\*

### 1. むらおこしの経過

#### 1) 現状認識は土俵づくり

町づくり・人づくり・村おこし運動（以下「むらおこし」という）は、昭和期の60年間に限っても、時の課題である経済更生・食糧増産・適地適作などの旗印を掲げ、行政主導の下、繰り返すすめられた経緯がある。

今日提唱されている一村一品運動は、住民の手づくり産品を主体とする地域住民の文化的な生産活動であり、観光・芸術文化・教育福祉など広い領域にわたり、新しい理念と手法をもっているが、むらおこしの流れを継ぐものに外ならない。したがって、その取組みにあたって第1に父祖・先輩の研究遺産を受継ぎ、第2は道内外の先進事例に学び、第3に地域の経済実態を解析するなど、現状をしっかりと認識することから始めることである。

これが、むらおこしの出発点であり、土俵づくりである。

本報は、この考え方のもとに、道内のむらおこしの事例について、その経過と現状のあらましを紹介し、問題点を摘出し、これからの活動に役立てることにしたい。

#### 2) 炬火をかざした青年群像

昭和初期。経済恐慌下、困窮した農民や商工業者の中に、夜逃げ、娘売り、自殺などの哀話を生んだが、政府は、精神作興―自力更生という精神運動をバネに、経済更生運動を展開、自給自足・勤儉貯蓄を奨励した。現金支出は釘と塩だけ、火打ち石で火をおこすなど、ロビンソン・クルーソのようにすべてを自足した農民が実在した。冷涼な本道では、自衛措置として、田と畑、畜産、山

林部門を複合する多角経営、多種作物を組み合わせる危険分散方式が普及した。

この低迷期、農業青年たちは“青年一人一研究”に没頭し、その実績の中には、現行農法の基礎になった品種改良・輪作・堆厩肥生産などがあり、なかでも冷温床育苗法は、今日の水稲・玉葱・ビート栽培の基幹的技術となっている。一方、政治・経済にも関心を深め、資本の圧迫を受けながら農民が団結し、産業組合づくりに立ち上がった。農業、漁業、林業などの協同組合組織の源流は、この青年たちが拓いたのである。

経済更生運動の功罪はさまざまであるが、寒冷地農業技術と経営の基礎をつくり、産業組合を組織化するなど、農民がその力を自覚し、今日という「むらおこし」運動を実践した経験は貴重であった。しかし、その実績も空しく第二次大戦は、青年を戦場に駆り立て、農村は軍需作物生産工場に変わっていった。

#### 3) 産業の発展と農村工業の崩壊

戦後、農地解放や新憲法公布など大変革を経た国民意識は、勤儉貯蓄の耐乏型よりも、生活改善・生活環境整備など生活文化を享受する生活重視型を指向、農山漁村においても、農村文化運動は盛り上がった。生活改善運動を土台にした、ハム・ソーセージ・ホームスパンなど畜産加工工場が、木工場、でんぷん工場と並んで農村文化を象徴する星であった。しかし、都市における同種産業が発展してくると、販売不振や仲間同士の経営競合によって経営が困難となり、20年代にほとんど姿を消していった。代わって、農村はもとより都市を含めて全国を覆ったのは、利潤の追求を第1とする規格品大量生産時代の到来であった。この時

\*（こばやし てつろう・地域計画）

流の中で、明日のむらおこしを企業感覚でとらえ、農業技術の習得と経営の確立にはげみ、いわば“考える農民”をめざす農村青少年クラブが道内各地に誕生した。同じ趣旨のグループが漁業・林業にも発足、今日につづいている。

#### 4) 曲り角の時代——量から質へ

30年代に入ると、高度経済成長がつづき、鉄鋼・電機・重化学工業の急成長は、農村から労働力を奪い三チャン農業といわれた。洗濯機やプロパンガス、テレビに象徴される生活の向上と共に、動力耕耘機も普及、金のかかる暮らしが強要された。新しい農業経営を求める農民の動きは、生産性を追求する農業をつくるために、農村の側から“曲り角”論議を起こしてきた。40年代に入って経済成長は頂点に達し、石油ショックを契機に低経済成長時代に急旋回し、沿岸漁業の不振と林業の低迷。農業も大幅の減反、乳価の下落、本道唯一の特用作物ビートも規模縮小に転じた。この年代、八方ふさがりの農林漁業の突破口を開いたのは、栽培漁業、肉牛、花木、椎茸類であり、この作目は、50年代も発展をつづけたのである。

## 2. 一村一品運動の現状

### 1) 試行——新作目の開発

50年代。はっか・除虫菊・ニンジンなどに代わるものはないか。新作物・家畜・家禽・魚種・樹木を探し出して、特産品として定着させたいとして、そのメニューは多彩・多岐にわたり、さながら動植物図鑑を見るようである。南方産のキウイ・フルーツそして中国菜が、本州の栽培作物として定着しはじめており、本州、外国に目が向くのは時の流れであった。

じゅんさい・はまぼうふうの移植、木いちご、グスベリー小果樹改良種、桜島大根・はとむぎ一本州ものの栽培、ステビア・朝鮮人参—外国種の移入、イノブタ・あいがも—代雑種の飼養、草魚・すっぽん・セラピア—道外・外国種の養殖など、幅広く大胆な実験が行われた。すでに、山菜は各地に加工場が操業、ビール麦・ホップ・薬草・ブルベリーなどは契約栽培、あまちゃづる・百合根・野沢菜・あいがも・ミンク・セラピアなどは、生産団地を形成するまでになった。

しかし、この実績はささやかで、かつて、昭和30年頃まで、国際的な評価のあった本道の特用作物—はっか・除虫菊・亜麻・大麻・みぶよもぎなどに肩を並べるには程遠く、まだ緒についた段階である。これら特用作物の不振、減反などの損失を埋め、さらに上乘せする—失地回復をめざす新作目の栽培・養殖・加工・販売の研究は、今後に期待するところが多い。

### 2) 主産地形成の動き

農林水産物の主産地は、需要動向や生産者側の都合などで変化してゆく。銘柄に結集した主産地間の競争は、果てしないマラソンに例えられる。以下、主な特産物を挙げよう。

農産 40年以降、急成長したのは野菜と花卉で、その主産目は、玉ねぎ・アスパラガス・スイートコーン・メロン・大根・キャベツ・白菜・レタス・セロリーである。道産玉ねぎは好評で、全国の10月～3月需要の8割をまかなっている。産地は札幌からの石狩川流域であったが、品種改良・移植栽培・根切りなどの技術により、今では北見・富良野地方にも主産地が北上した。グリーン・アスパラは、後志から胆振・上川・十勝が主産地で、空輸75%の本州送りの実績は、毎年、倍々の急成長である。スイート・コーンは、契約栽培、十勝・上川・後志・網走が主産地で、輪作、省力作物として重視されている。メロンは、空知から、上川・後志・胆振に根付き、赤肉・青肉・プリンスなど、人気は高い。花卉は年ごとに10～20%と生産をのばし、成長作物として注目されている。洋花が主流で、切花用のカスミソウ・カーネーション・ストック・バラなどの人気が高い。石狩・空知・上川・後志・渡島・胆振に産地が集中しており、生産組合を母体に、全道連合会、卸売市場をもち、研究、生産、販売、調整の体制が整備されている。

畜産 酪農—乳牛は現在80万頭、道東・道北がその基地である。肉牛は、現在24万頭、65年は50万頭余を計画。肉牛品種のほとんどは、乳用牝子牛の肥育で主産地は十勝。十勝牛の名は関西市場など本州にも定着している。黒毛和種は胆振・十勝・網走、外国種のアンガース・ヘレフォードは、上川(上川・名寄)である。養鶏は、生産・輸送

のコスト面から、消費地近郊の温暖な地域。養豚も飼料・流通の利便性から都市近郊に定着している。

**水産** 漁業専管水域が200カイリに制限されて以降、栽培漁業はさらに重視され、種苗生産と、さけます孵化事業が強化された。秋さけは、5、6年前まで道東・オホーツク海に限定されたが、今では道内河川のほとんどに回帰、45年—500万匹、現在2,000万匹に漁獲量が飛躍的に増加した。ホタテ・アワビ・ウニ・コンブ・ワカメなどの種苗生産が、活発に稼働して、沿岸漁業の様相を変えつつある。ホタテは、45年生産量の約14倍と急増、養殖コンブも全生産量の20%を占めるなど、総じて栽培漁業は成果をあげてある。“いたどり”の葉を利用するウニの養殖研究は実用化、種苗センターがすでに積丹に操業。淡水魚は、各地に普及。空知・石狩のどじょう、桧山・後志・空知のやつめ東川・弟子屈・島牧のテラピアなどは、すでに市場に出まわっている。

**林業** 森林は、治山・治水—国土保全、林産物生産の役割をもつが、最近、森林浴の効用が注目され、健康維持、観光レクリエーションの面からの期待が寄せられている。林業の低迷は久しいが、えぞからまつ材の利用促進の期待とあわせ、都市緑化を担う緑化樹生産、花いっぱい運動—花木生産、そして、健康食ブームののったきのこ生産が全道に分布している。しいたけは需要が大きいにもかかわらず、その生産量は道内消費の30%にすぎず、増産がのぞまれている。

### 3) 花ざかりの1.5次産業

すでに述べたように、農林水産物の新作目の栽培、養殖の研究が多彩に行われているが、これらはまた加工原材料であって、農畜林水産加工の研究・生産も花ざかりである。

**農産加工** 池田ワイン、清里の“じゃがいも焼酎”に先導され、果実酒・焼酎への関心は著しく高いが、地場製造は少なく委託製造が主体である。木いちご、ハスカップ、カーランズなどの小果樹と、アスパラガスなどの、ジャム・シロップ・ジュース・菓子などの加工も目立っている。南瓜・馬鈴薯・玉ねぎ・食用百合などの多目的加工法が、熱心に研究されている。ひまわり油・わら加工な

どは、商業ベースにのり始め、あまちゃづる・えぞうこぎなどの健康茶加工などは、商品として全国的に関心を呼んでいる。

**畜産加工** 乳製品・肉加工・くんせいなどが主流。とくに、チーズづくりに取組む町村は約20と、関心が高い。稚内のドリンク・チーズ、標茶の牛乳カマボコなどの着想は有望であろう。肉加工は、ハム・ソーセージ・ベーコンのほか、ジャッキー・コンビーフ、そして、つくだ煮・味噌づけなど、和洋両様の工夫が重ねられている。ミンクは北のファッションを創る毛皮として、道民の関心は高い。

**水産加工** ブナ鮭の加工研究はとくに多く、アイヌの伝統を継ぐ“トバ”，あきあじ鍋パック、ソーセージ・ハンバーグ・サラミなど、和洋食メニュー総動員の観がある。家庭、レストラン、学校給食などに普及がもたれる。いか・すけとう・帆立貝など魚貝類は、くんせい・干物などに、淡水魚も、カンロ煮・くんせい・つくだ煮などで変わりばえがなく、新しい加工法の開発が期待される。最近、江差の漁協・商工会青年部が共同開発した、いかの“いきり火沖漬”そして根室の“さんまのさしみパック”，伊達の“こんぶのぐい呑み”などは注目されている。

**林産加工** 合板・集成材などは、安定した需要を踏まえて生産されている。“からまつ加工”は留辺蘂、帯広などで新製品が創られ、伝統的な家具、建具、スポーツ用具、割箸・木炭生産なども継承されている。地力培養剤として開発された、木皮、のこくず利用のバーク堆肥は、企業、農協が生産をつづけ、地力づくり運動が叫ばれているおりから、国庫補助も得て今後への期待は高い。

### 4) イベント—産品まつり・観光農園

市町村地域のイベントを、神社のお祭り、収穫祭、観光客招致を目論む催物に類別することができる。むらの鎮守である神社の祭典は、戦前の挙村的な賑かさを取戻せないでいるが、勤労感謝の日（新嘗祭）を前後する収穫祭は、品評会、共進会、試食会、即売会を内容として各地に育ってきた。ワイン祭り、牧場まつり、“カキ”まつりのように、1品ごとのものから、農林水商工業を総合した産業祭まで多様である。観光客招致目的の

催物は、“しばれ”まつり・流水まつり・江差追分・人間ばん馬・恐竜まつりなど、郷土の自然・芸能・生活文化に根ざしたもので、バラエティに富んでいる。この企画を大がかりにしたのが、雪の祭典、味覚まつり、ジャズ・フェスティバルなどであるが、いずれもまだ歴史が浅く、地域社会に根をおろすまでになっていない。観光農園は、地場産品の常設展示場ともいえる。太陽と空気、牧歌的風景そして新鮮な果物・野菜・牛乳・卵などの食物や土産物もあって、バス・列車が観光客をこの農園に送迎している。釣堀・溪流釣・潮干狩・鮭そ見学・森林浴なども同じ類型にあり、産地直売一庭先販売・産品PR・観光などの場として、その効用は多様である。

### 3. 今後の方向

前記の繰り返しになるが、実態調査―技術開発―協同活動―主産地形成と育てる順序がその基本方針になろう。このうち、とくに留意すべき事項について、若干ふれてみたい。

#### 1) 先行作品に学ぼう

論より証拠、理論より実際。一村一品運動を進めるには、手本と目した先行作品について現地現物から学ぶことである。全国的に名高い作品―十勝ワイン、優佳良織、ホワイト・チョコレート、松尾ジンギスカン、札幌ラーメンなど。また地域に根づいて、土地の代名詞になっている作品に別海―北海しまえび、根室―かに、厚沢部・帯広―メークイン、新得―野沢菜漬物、音威子府―そば、鹿追―おしよこま、朝日―将棋駒、小樽―ガラス小細工、森―いかめし、長万部―かにめし、日高―やまめ、などがある。これらは旅行者、用務出張者の復命書がわりになるほどの銘柄になった。洞爺の“わかさいも”は、50年の歴史をもつ伝統的銘菓、観光地土産として由緒がある。地域資源の大福豆、コンブを原料に、地元で生産、地元商店街で販売している。農・漁・商・工・労・観光の各部門を一体とした地域ぐるみの産品であり、先達となる好例である。これらの原料、加工法、販路などにつき、手本のオリジナリティを侵さないように配慮しつつ、勉強することが最善の学習法であろう。

#### 2) 牽引力は技術

玉ねぎ・トマト・メロンなどの農産物は、市場に積出す前に入念な選果を行う。産地―銘柄の信用を落としては市場参入はできないからである。流通に耐える品質を作り出し、維持する力は技術であり、したがって産地の技術研究は一日たりともゆるがせにできない。まして、新産品を創り出すには、それ相当の工夫・努力が伴う。たとえそれがイミテーションから出発しても創意を付加してゆかなければ、戦列に参入できない。したがって先進市町村の多くは、自ら試験研究に取組み、成果をあげている。たとえば、月形（花卉・野菜）、東藻琴（ナチュラル・チーズ）、南茅部（コンブ）、稚内（ドリンク・チーズ）、滝上（新作目開発）、大成（あわび）などは好事例である。

#### 3) 主産地づくり

市場を確保するためには、安定した供給体制が必要であり、このために、小さな生産者は共同して生産力を大きくしなければならぬ。現状の道内産地規模では、相互協力して生産、販売体制を強化しなければ、市場競争に立ち向かうことはむずかしい。後発が先発の足を引っぱり、やがて共倒れになる例は今も見受けられる。非力な産地同士が内戦で脱落してしまうことは繰り返したくないものである。先発と後発、近隣の生産団体が連合して体質を強化するため、その連絡調整をはかることは緊要の課題である。本道の花弁の生産組合―連合会―花卉市場は、この課題解決に向けて先行する好事例である。

#### 4) 観光は総合ビジネス

観光産業は、今大きく様が変わりしている。日帰り―滞在。名勝温泉―スポーツ・レクリエーション。みる旅―する旅・体験する旅。宴会（軟派観光）―牧場で汗を流す（硬派観光）。グループ旅行―家族旅行と変化している。新しい観光レクリエーション時代の到来である。本道は、この新しい動向に対応できる諸条件が備わっている。雄大な自然と土地、新鮮で美味しい食物。牧場・漁業など産業活動の場。スキー、ゴルフ、テニสนามなどのスポーツ施設などの観光資源。青函トンネルの

利用、ジェット機乗入空港の増加など、前途は明るい。この展望のもとに、占冠のリゾート地域開発、七飯の大沼開発などを先駆に、網走—アカデミア構想、訓子府—遊学ゾーン、標津—カムイ・チップの里、上湧別の梅、下川のすももなど、観光地づくりのさまざまなプランが進められているのである。観光産業は、地域住民全員が担い手といわれる総合ビジネスであり、その利益は各部門に配分されなければならない。これからの一村一品運動は、観光地づくりと連携することにより、新しい途が開けてくるであろう。ニセコ町—民宿。絞別—流永。陸別—しばれ体験。上士幌—熱気球。富良野—へそ祭などは、これからの地域観光開発を立案する上で興味深い。

#### 5) むらおこしは人づくり

産品を創り出し、主産地を築く、その力の源泉は、明確な問題意識にある。これが意欲となり、創意工夫を生み出し、その継続が歴史をつくり上げてゆくのである。人は組織に結合して、力を幾倍にもする。1人ではできない企画立案・技術開発・市場参入を果たし、これに必要な資金も運用して、利益を生み出す。組織の力は大きい。この

ように、人の意識と行動を結びつけ課題を解決するシステムを、プロジェクト活動という。むらおこし—一村一品運動は、このプロジェクト活動そのものの性格をもつ。この思考・行動様式—プロジェクト活動の盛り上がり、輪の広がりが成否を決めるのである。前述の江差—“いかのいさり火沖漬”は漁協・商工会青年部の共同プロジェクト。深川—銘柄米ユーカーは、近郊農協青年部、穂別—パーク堆肥は町青少年クラブが、それぞれ中核的な役割りを果たしている。農業法人では、士別—士別農園。富良野—共済農場。北竜—ひまわり農事組合。白老—白老牛組合などは、研究、生産、販売と一貫した活動を担当、着実に実績をつみ上げていく。これらは、まさに組織の成果であり、組織の力を見せる好事例である。多くの学習研究グループがあっても精気を失った慣行活動の中に埋没しているものが目立つ。しかし、これらの集団が問題意識をもったとき、それは、目的遂行に生きるプロジェクト・グループになる。既存グループの活性化を期待すると共に、新しいグループの出発を促したい。これが、一村一品運動のエネルギーであり、推進力となるからである。